

プロレタリアート独裁の 歴史的経験について

外 文 出 版 社
北 京

外 文 出 版 社

中 華 人 民 共 和 國 北 京

1 9 5 6

プロレタリアート独裁の 歴史的経験について

この文章は『人民日報』編集部が、中國共產党中央委員会政治局拡大会議の討議にもとづいて書いたもので、1956年4月5日づけの同紙に掲載された。 （編集者）

外 文 出 版 社
北 京

ソ同盟共産党第二十回大会は、國際關係と國內建設のあらたな經驗を總結し、社会制度の異なる國々が平和に共存できるというレーニンの政策をゆるぎなく実行してゆくこと、ソヴェト民主主義制度を發展させること、党の集團指導の原則をあくまで守りとおすこと、党内の欠点を批判すること、國民經濟發展のための第六次五カ年計画を定めることなどについて、一連の重大な決定をおこなった。

個人崇拜に反対する問題は、ソ同盟共産党第二十回大会で重要な地位をしめている。第二十回大会は、個人崇拜が流行していることを極めてするどくあばきだしたが、この現象は、かつて長いあいだ、ソ同盟の生活のなかで、活動上の誤りとわるい結果をたくさんうみだしたのであつた。ソ同盟共産党が自己のおかしたこれまでの誤りについておこなつたこの勇敢な自己批判は、党内生活の高い原則性とマルクス・レーニン主義の偉大な生命力をあらわすものであつた。

搾取階級に奉仕し、政權についている政党あるいは政治團體で、自分たちの黨員大衆をまえにし、人民大衆をまえにして、自己の大きな誤りを眞剣にあばきだすことを敢てしたものは、いままでの歴史にもなかつたし、現在のどんな資本主義國にも、ひとつもない。ところが、労働者階級の政党は、それとはまったく異なっている。労働者階級の政党は、廣はん人民大衆に奉仕する政党であつて、このような政党にとつては、自己批判をおこなうことによつて、誤りを失うほか、

なにひとつ失うものとはなく、得るものはかえつて、廣はん人民大衆の支持である。

世界のあらゆる反動派は、さいきん一カ月あまりのあいだ、個人崇拜についてのソ同盟共産党の自己批判にたいして、まるで鬼の首でもとつたように取沙汰している。彼らはいう、それみたことか！ 世界ではじめて社会主義制度をうちたてたソ同盟共産党でさえ重大な誤りを犯した、しかもそうした誤りをおかしたのが、あのひじような名声を博し、榮譽をになつていた指導的人物のスターリンなのだ、と。反動派は、いまこそ、ソ同盟や各國の共産党を中傷することのできる材料をにぎつたと考えている。しかし、反動派は、けつきよく『骨折り損』に終るほかない。マルクス主義の代表的人物がどんな著作のなかで、われわれは永久に誤りを犯すことはないとか、ある特定の共産党員だけは絶対に誤りを犯すことはないなどと、かつて述べたことがあつただろうか？ われわれ共産党員の党内生活に批判と自己批判の制度があるのは、われわれマルクス・レーニン主義者が、大小いづれの誤りも犯すことのない『神の如き人間』などというものがあるとはもともと考えていないからではないだろうか？ ましてや、世界史上に前例のない、プロレタリアート独裁をはじめて実行した社会主義國家が、あれこれの誤りを犯すことはないなどといったことがどうして考えられるであろうか？

一九二一年十月に、レーニンはつぎのようにのべた。

「われわれのソヴェト体制をわれわれが建設する場合の失敗や誤りにたいして、瀕死のブルジョアジーやこれにくつついてゆく小ブルジョアの民主主義の犬ころや豚どもが、呪詛、雑言、嘲笑をさんざん浴せかけるといふなら、そうさせておけ。われわれのところには、失敗や誤りが實際たくさんあつたし、いまもまた、たくさんやられている。このことをわれわれは、たとえ一分間でも忘れはしない。いまだかつてみられなかつたような型の國家機構を創造するといふ、こういう新しい、全世界史にとつても新しい仕事をするうゑに、失敗や誤りなしにすまそうなどとはとんでもない話だ！ われわれは、われわれの失敗や誤りを是正するために、そしてソヴェト的諸原理を實際に運用するといふ、およそ完成にはほど遠いわれわれのこの仕事を改善するためには、うまずたゆまずたたかつてゆこう。」

はじめになんらかの誤りを犯せば、もう二度とはかになんらかの誤りを犯すことは必然的に永遠にありえないとか、また、もとおかした誤りを多かれ少なかれ再びくりかえすことも必然的にありえないなどといふことは、これまた考えられないことである。人類社会は、利害を異にするいくつかの階級にわかれていらい、奴隸主の独裁、封建領主の独裁、ブルジョアジーの独裁を経ており、これらの独裁はいく千年ものあいだつづいた。そして、十月革命が勝利していざ、人類ははじめて、プロレタリアートの独裁を経験するようになった。まえの三つの独裁はいずれも擯取階級に

よる独裁であるが、封建領主の独裁は奴隸主の独裁よりもいくらか進歩的であり、ブルジョアジーの独裁は封建領主の独裁よりもさらにいくらか進歩的である。社会の發展史上で一定の進歩的な役割を演じたこれらの搾取階級は、総じて、ながいあいだに無数の歴史的な誤りを犯したばかりでなく、いくども誤りをくりかえすことによつて、はじめてその支配の經驗をつむことができたのであつた。しかし、彼らの代表する生産関係と生産力とのあいだの矛盾がするどくなるにつれて、彼らは、なおも不可避的により大きな、より多くの誤りをおかして、被圧迫階級の大規模な反抗と彼らじしんの内部的崩壊をまねき、ついには自己の滅亡をはやめた。プロレタリアートの独裁は、それいぜんのどのような搾取階級の独裁ともまったく性質のちがつたものである。それは被搾取階級による独裁であり、多数者の少数者にたいする独裁であり、搾取のない、貧困のない社会主義社会をつくりだすための独裁であり、人類史上もつとも進歩した、そしてまた最後の独裁である。このような独裁は、歴史上もつとも偉大にして、もつとも困難な任務をにない、歴史上もつとも複雑な狀況ともつとも曲折にとむ闘争に直面しているのだ、その仕事も、レーニンがのべたように、多くの誤りを犯さないわけにはいかないのである。もしも一部の共産黨員がおごり高ぶつていい氣になつたり、思想の硬化をきたしたりするようなことがあれば、彼らはいぜん自分がおかした誤り、または他人の犯した誤りをくりかえすようなことにさへなる。この点を、われわれ共産黨員はじゅう

ぶん考えにいれておかなければならない。強大な敵にうち勝つために、プロレタリアートの独裁は、権力の高度の集中を要求する。この高度に集中された権力は、高度の民主主義とむすびつかなければならない。集中制が一方的に強調されると、多くの誤りを生じることになる。この点も、人びとのまったく理解できるところである。しかし、どのような誤りがあるにせよ、人民大衆にとつては、プロレタリアートの独裁の制度は、搾取階級による独裁のあらゆる制度より、ブルジョアジーの独裁の制度より、なんといつてもはるかにまさっている。レーニンのいつた、『もしわれわれの敵が、ボリシェヴィキがずいぶんばかげたことをやつたということはレーニン自身が認めているではないか、といつて、われわれを責めるならば、わたくしはこれにたいしてつぎのように答えない。

——そのとおり、だが、それでもわれわれのばかげたことは、やはりあなたがたのとはまったくちがった種類のものであることをご存じないか、と。』というこのことはまったく正しい。搾取階級は、略奪を目的としているところから、つねに彼らの独裁を永久に、子々孫々にいたるまでもちつづけたいとのぞみ、これがためあらゆる手段をもちいて人民をしいたげるのであつて、彼らの誤りはただすことのできないものである。ところが、プロレタリアートは、人民を物質的に精神的に解放することを目的としているところから、自己の独裁という條件を活用して、共産主義を實現し、人類の融和を實現することによつて、自己の独裁をしだいに消滅させてゆくのであるから、

人民大衆の主動的な精神と積極的な役割をできるかぎり發揮させるのである。ところで、プロレタリアートの独裁のもとで、人民大衆の主動的な精神と積極的な役割が無限に發揮できるということのなかには、プロレタリアートの独裁の時期におかすさまざまな誤りをただしうることも当然ふくまれているのである。

共産党と社会主義國家の各方面の指導的人物の責任は、できるかぎり誤りをすくなくし、重大な誤りはできるかぎりおかすことをさけ、個々の、局部的な、一時的な誤りのなかから教訓をくみとることに注意をはらい、これら個々の、局部的な、一時的な誤りを全國的な、長期にわたる誤りにたचितらせないように努めることである。そして、この目的をはたすに必要なことは、すべての指導者が、きわめて慎重みぶかく謙虚であり、大衆としつかりむすびつき、ことあるごとに大衆と相談し、實際狀況をくりかえし調査研究し、たえず実情にあつた、適切な批判と自己批判をおこなうことである。党と國家のおもな指導者としてのスターリンが、その後期の活動のなかである種の重大な誤りを犯したのは、彼がそういうふうにしなかつたがためである。彼はおごりたかぶり、慎重みぶかさを失い、その考えのうえに主觀主義がうまれ、一面的なところが生じて、ある種の重大な問題について誤つた決定をくだし、ゆゆしい惡結果をもたらしたのであつた。

偉大な十月社会主義革命の勝利によつて、ソ同盟人民とソ同盟共産党は、レーニンの指導のもと

に、世界の六分の一をしめる地上にはじめて社会主義國家をうちたてた。ソ同盟は、急速に社会主義的工業化を実現し、農業の集團化を実現し、社会主義的な科学と文化を發展させ、ソヴェト同盟というかたちのもとで國內の多くの民族の強固な同盟を形成した。そして、ソ同盟内の立ちおくれていた民族は社会主義的民族にかわつた。第二次世界大戰中には、ソ同盟は、ファシストをうち敗る主力となつてヨーロッパ文明をすくうとともに、東方の人民が日本軍國主義をうち敗るのを援助したのであつた。これらすべての輝かしい成果は、全人類に社会主義と共產主義の光明にみちた前途をさししめし、帝國主義の支配を大きくゆるがし、恒久平和をめざす全世界の闘いのなかで、ソ同盟を最初の、そしてつとも強固な保壘にした。ソ同盟は、他のすべての社会主義國の建設をはじめ、これを支持し、全世界の社会主義運動と植民主義反対運動、人類の進歩をめざすあらゆる運動をあげました。これらはすべて、ソ同盟人民とソ同盟共產党が人類史上にうみだした偉大な業績である。こうした偉大な業績をうみだす道をソ同盟人民とソ同盟共產党にさし示したのは、レーニンであつた。レーニンの方針を実現するためにおこなつた闘争のなかには、ソ同盟共產党中央委員会の強力な指導の功績があり、そのなかには、当然スターリンの不滅の功績がふくまれている。

レーニンの死後、党と國家のおもな指導的人物としてのスターリンは、マルクス・レーニン主義を創造的に運用し發展させた。そして、レーニン主義の遺産をまもり、レーニン主義の敵——トロツ

キストやジノヴィエフ一味、その他ブルジョアジーの代理人に反対する闘いのなかで、彼は人民の意志と願望を示したのであり、傑出したマルクス・レーニン主義の闘士としての名にそむかなかつた。スターリンが、ソ同盟人民の支持をえ、歴史上で重要な役割をはたすことができたのは、まず第一に、彼がソ同盟共産党のその他の指導者といつしよになつてソヴェト國家の工業化と農業集團化についてのレーニンの路線をまもつたがためであつた。ソ同盟共産党は、この路線を実行にうつして、ソ同盟において社会主義制度の勝利をもたらすとともに、ヒトラーに反対する戦争でソ同盟が勝利をかちとる條件をもつくりだした。そして、ソ同盟人民のこれら一切の勝利は、全世界の労働者階級とすべての進歩的な人びとの利益に合致するものであつた。そのために、スターリンといふこの名も、おのずから全世界できわめて高い榮譽をになうようになった。ところがスターリンは、レーニン主義の路線を正しく運用して國內國外の人民のあいだできわめて高い榮譽をになうようになる、間違ひもはなはだしく自分のはたした役割を不相應なまでに誇示し、かれ個人の権力を集團指導と対立する地位においた。その結果、自分自身のある種の行動は、自分がもともと宣傳してきたマルクス・レーニン主義のなかのいくつかの基本的な觀點と対立する地位におかれるようになった。一方では、人民大衆こそ歴史の創造者であることを認め、党は永久に大衆とむすびつかなければならぬとし、党内の民主主義を發展させ、自己批判と下から上への批判をさかんにしな

ければならぬことを認めながら、他方では、かえつて個人崇拜をうけいれ、それを奨励し、個人の専断で事をはこび、このために、スターリンはその後期に、この問題において、理論と実践がくいちがうという矛盾に陥つた。

マルクス・レーニン主義者は、指導的人物の歴史上における大きな役割をみとめている。人民と人民の政党には、人民の利益と意志を代表し、歴史的な闘争の最前線にたつて人民大衆をみちびいてゆく先進的な人物が必要である。個人の役割をみとめず、先進的人物と指導的人物の役割をみとめないのは、まづたく誤っている。しかし、党と國家のどのような指導者にせよ、個人を党と大衆のなかにおかないで、逆に個人を党と大衆のうえにおき、大衆から浮いてしまうと、國事についての全面的な洞察力を失つてしまう。そうなれば、たとえスターリンのような傑出した人物でも、ある種の重大な事柄について、やはり實際に合わないまちがつた決定をくだすことはさけられない。スターリンは、ある種の問題について、個々の、局部的な、一時的な誤りのなかから教訓をくみとり、それらの誤りを全國的な、長期にわたる重大な誤りにたちいたらせないようにすることができなかつた。スターリンは、その後半生において、いよいよ個人崇拜をよろこぶようになり、党の民主集中制に違反し、集團指導と個人責任制をむすびつける制度に違反した。そのため、つぎのようないくつかの大きな誤りがおこつた。それは、反革命分子の肅清問題のうえで拡大化があつたこ

と、反ファシスト戦争の直前に必要な警戒心を欠いてしたこと、農業の一層の発展と農民の物質的福祉について当然はらうべき注意を欠いてしたこと、國際共產主義運動についていくつかの誤った意見を出したこと、とりわけユーゴスラヴィアの問題について誤った決定をおこなったことなどである。スターリンは、これらの問題について、主観的、一面的になり、客観的な實際状況からはなれ、大衆から浮きあがつた。

個人崇拜は、これまでながいあいだの人類の歴史がのこした、くされはてた遺物である。個人崇拜は、搾取階級のなかにその基礎があるばかりでなく、小生産者のなかにもその基礎がある。周知のように、家父長制は小生産経済の産物である。プロレタリアート独裁がうちたてられたのち、たとえ搾取階級が絶滅され、小生産経済が集団経済にとつてかわられ、社会主義がうちたてられたのちでも、ふるい社会のくされはてた、毒素をふくんだある種の思想の残りかすは、なおも人びとの頭脳のなかでひじようにながいあいだ生きのびる。『いく百千万の人びとの習慣の力は、もつとも恐ろしい力である。』（レーニン）個人崇拜もいく百千万の人びとの一種の習慣の力である。こうした習慣の力がなお社会にのこっている以上、それが多くの國家勤務人員に影響をおよぼすことはありうるし、スターリンのようなこうした指導的な人物でさえも、その影響を受けたのである。個人崇拜は人びとの頭脳に社会現象が反映したものであり、スターリンのような党と國家のこういう指

導的人物までがこうしたおくれた思想の影響をうけた場合、それは、逆にまた社会へ影響をおよぼし、事業の損失をまねき、人民大衆の主動性と創意性をそこなうことになる。

發展しつづけている社会主義的生産力、社会主義的經濟制度と政治制度、党生活は、個人崇拜という精神状態とますます矛盾し、衝突しあうようになってゐる。ソ同盟共産党第二十回大会がくりひろげた個人崇拜に反対する闘いこそは、まさしく、ソ同盟共産黨員とソ同盟人民がその前進の途上でおこなつた、思想的な障害物を一掃するための偉大な、勇敢な闘争である。

社会主義社会ではもはや矛盾などありえないというような單純な考え方がある。矛盾の存在をみとめないことは、とりもなおさず弁証法を否認することである。それぞれの社会のもつ矛盾の性質はおなじでないし、矛盾を解決する方法もちがうけれども、社会はつねにたえない矛盾のなかで發展してゆく。社会主義社会もまた、生産力と生産關係の矛盾のなかで發展するものである。社会主義社会でも共産主義社会でも、技術の革新、社会制度の革新という現象は、かならずひきつづきおこるのであつて、そうでなければ、社会の發展は停止し、社会は前進できなくなつてしまふ。人類はいまもなお青年期にある。人類がこんごあゆんでゆく道は、これまであゆんできた道よりも何倍ながいかわからない。革新と保守、先進と落後、積極と消極というこうした矛盾はいずれも、各種のちがつた條件、いろいろと異なつた状況のもとで、たえず現われるであろう。万事あいかわら

ず、つぎのように運ばれるであろう、つまり、ひとつの矛盾が他の矛盾をよびおこし、ふるい矛盾が解決されるとあらたな矛盾がまた生まれてくるのである。観念論と唯物論の矛盾は、社会主義社会または共產主義社会ではなくなつてしまふと考へているものがあるが、この見解はあきらかに正しくない。主観と客観の矛盾がなお存在するかぎり、先進と落後の矛盾がなお存在するかぎり、社会の生産力と生産関係の矛盾がなお存在するかぎり、唯物論と観念論の矛盾は、社会主義社会や共產主義社会でもやはり存在するし、さまざまなかたちをとつて現われてくるであろう。人間は社会のなかで生活しているのであるから、さまざまながつた状況やちがつた程度において、それぞれの社会のなかの矛盾を反映する。したがつて共產主義社会になつても、ひとりびとりがみな完全無欠な人間になるということはありません。そのときになつても、人間にはやはりそれぞれの矛盾があり、やはりよい人間とわるい人間があり、やはりわりあい正しい考えをもつものと、わりあい正しくない考えをもつものが存在するであろう。したがつて、人と人とのあいだにもやはり闘いがあり、ただ闘いの性質とかがちが階級社会とはちがうだけである。こういうふうに見てくると、社会主義社会で、個人と集團のあいだに矛盾した現象があるというのは、なにも不思議なことではない。そして、党と國家のどのような指導的人物であろうと、もしも集團指導から逸脱し、人民大衆からうきあがり、實際生活から遊離したならば、彼らは必然的にその考へが硬化して、重大な誤

りをおかすことになる。われわれにとつてぜひとも警戒しなければならないのは、一部の人びとが、党と國家が仕事のうえで多くの成果をあげたために彼ら自身人民大衆から大きな信頼をえる、と、こうした大衆の信頼を利用して權威を濫用し、いくつかの誤りをおかす可能性がある、ということである。

中國共產党は、ソ同盟共產党が個人崇拜に反対するというこの歴史的な意義をもつ闘争において、おさめた大きな成果に祝意を表するものである。中國革命の経験がおなじく証明しているように、人民大衆の知恵にたより、民主集中制にたより、集團指導と個人責任制をむすびつける制度にたよることによつてのみ、はじめてわが党は、革命の時期においても、國家建設の時期においても、偉大な勝利と成果をかちとることができたのである。中國共產党はこれまで、革命の隊伍のなかで、大衆からはなれた個人の出しやばりと個人英雄主義にたえず反対してきた。大衆からはなれた個人の出しやばりや個人英雄主義といった現象が、これからも長いあいだ存在することは疑いのないところである。それは、いちど克服しても、また現われてくる。ときにはこの人たちに現われ、ときにはまたあの人たちに現われる。人びとは、個人の役割に注意をひかれると、大衆や集團の役割を見おとすのがつねである。このため、一部の人は度はずれにうぬべれたり、自己を妄信したり、あるいは他人を盲目的に崇拜する誤りをおかしやすい。したがつて、大衆からはなれた個人の出し